

令和7年度第1回 鏡川清流保全審議会 会議録（要旨）

日 時 令和7年10月21日（火）10時00分～12時00分
場 所 高知市清掃工場 大会議室
出席者 高知大学 關名誉教授
元国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所四国支所
流域森林保全研究グループ 奥村研究専門員、
物部川21世紀の森と水の会 兼松事務局長、南国生活技術研究所 黒笛代表、
高知市森林組合 池田代表理事組合長、高知大学農林海洋学部 松本講師、
物部川漁業協同組合 松浦組合長、
高知県林業振興部・環境部 自然共生課 濱口課長（傍聴）
高知市環境部 澤村部長、和田副部長、新エネルギー・環境政策課 田村、岡宗、中澤、
森、綿谷、宮田
欠席者 鏡川漁協協同組合 高橋組合長、高知工科大学環境理工学群 堀澤教授、
高知県林業振興・環境部 竹崎副部長、高知県土木部 大野副部長

（1）会長・職務代理者の選出

- 委員の互選により、關委員を会長に選出
- 会長の指名により、堀澤委員を会長職務代理者に決定

（2）次期鏡川清流保全基本計画の策定について

- 資料1～資料3について、事務局から説明
- 質疑応答

【委員】

- 様々な関係人口の取組について、我々は広報「パートナーシップだより」をメールでもらって知る機会があるが、高知市民にどこまで広がっているのか、どこまで知っているのかというのが気になる。
- やはり課題となるのは、やりっ放しになってしまふこと。本来はもっともっと知らせないといけない。活動は、要はネタをどのように活かすかが重要で、このネタをどこまで広げられているのか、こういうふうに活かしているということがあれば教えてほしい。

【事務局】

- 活動している人たちの中では、目的や必要性、成果などが共有されるが、直接参加をしていない、関係していない方は、自分から情報を取りに行かないと取れないという点は、いろいろな活動の共通の課題だと考えている。

- ・環境保全の活動は、コミュニティという考え方では、いわゆるテーマコミュニティに当たるもの。地域コミュニティとの関係性でいくと、情報をいかに届けるか、届けることと伝えること、伝わること、その共通性をどのようにとっていくのかが課題である。
- ・これまで何月何日に実施し、参加を募るというイベント形式で行うことが多く、高知市で開催した「鏡川わくわくツアーワーク」では、親子 20 組 40 名程度が現地参加し、鏡川のことを 1 日かけて学び体験するということをやっていたが、コロナ禍など、集まって活動することがやりづらい時期もあった。
- ・情報の広がりを持たせるためには、従来の手法だけでは限界を感じるところもあり、鏡川流域関係人口創出事業を始めたきっかけでもある。
- ・その際、事務局として一番大事に考えていたのが、今言われた情報の広げ方、広がり方、伝え方、伝わり方である。目に見える形でどう表していくのか、一日だけの活動ではなく、年間を通じた経常化、日常化していくにはどうしたらいいのかを考えた結果、「パートナーシップだより」を週 1 回、多いときには週 2 回発行し、現在では 200 号を超える発行ができている。また、活動がないと発信するネタがないので、アイデアを出しながら今まで続けてきている。
- ・それら全てを可視化できるような仕組みとして取り入れたのが「まちのコイン」である。いわゆる地域通貨だが、換金性はなく、アプリでコインをやりとりすることで、こんな活動をしている、こんなことがあるのか、参加した人はこんなことを考えているのかなどを共有できる仕組みとなっている。おかげさまで 4 万回を超えるやりとりがあり、一つの情報の広げ方、広がり方につながるものと考えている。

【委員】

- ・全体を通じた事業計画という定量的な数字を出していただけるのはとても良いと思うが、今ご指摘があったように、どのくらい広がっているのかがこの中で出ていないと自分も思う。
- ・もう一つは、情報のソースはあるので、今度はどのように情報を扱うのか。もっと情報を扱うメディアを意識してはどうかと思う。
- ・例えば、鏡川流域関係人口創出事業で使っている「ほっとこうち」でも情報を出してもらえると良い。
- ・また、「あかるいまち」に、もっと頻繁に鏡川のこと、特に関係人口の取組が定期的に出てくるような枠をとってもらいたい。もっと庁内で内容を揉めば、良い案が出てくる可能性はあると思う。
- ・私は、須崎市の地域おこし協力隊として、高知新聞で年間を通じて月 1 回の枠をもらって情報発信している。高知新聞の購読率は、高齢者を中心に非常に高く、隅から隅まで読んでいる方がたくさんいる。月一のコラムをもらうとか、情報を扱うメディアをもう少し広げてもいいのではないかと思った。
- ・それと、以前から言っているが、市役所職員 3,000 人の中に、鏡川の関係人口がどのくらいいるのかという問題である。
- ・関係部局等にキーパーソンが何人かいると、関係人口として大きな力になると思うので、庁内で積極的にそういう人たちを養成してもらいたい。例えば、鏡川のイベントには庁内の職員も一緒に行ってもら

うとか。

- ・3,000人規模の組織は、高知県には高知市役所と県庁くらいなので、その人材をもう少し使うような展開をしてもらいたい。組織の中でなかなか難しいとは思うが、そういう内容が成果の中に、例えば参加した職員数や延べ日数等が出てくると、高知市が本格的に取り組んでいる感じが出てくると思う。
- ・市民が見ると、大きな力になると思うので、ぜひこの次のステージでやっていただけたらと思う。

【委員】

- ・私がこの審議会に関わって、過去にいた職員で、本当に鏡川が好きな職員と一緒に仕事をしたときが一番面白かった。その職員は、いろいろなアイデアがあって、自分で組織を立ち上げたり、多くの専門家を呼んだりもしていた。私も同じような立場にいたのでよく分かる。
- ・黒潮町の職員で、砂浜美術館を立ち上げた方の名言に、「公務員が本当に良い仕事しようと思ったら公私混同しないといけない」という言葉がある。もちろん権限に関わることはあるが、公私の区別についているうちは難しい。3,000人の職員の中から、そういった公私混同する人をぜひ集めてもらいたいと思う。
- ・もう一つ、私は高知県と物部川の清流保全協議会を立ち上げてやっているが、いつも難しく思うのが世間の無関心である。
- ・我々は、濁水や渴水に困っているから対策に取り組んでいる。ところが、流域の皆さんには、川にアユがないなくても、水が少なくても、困らない。本当に困るのは、例えば、大渴水になって水道をひねっても水が出てこないとか、逆に、大洪水になって、自分たちは氾濫する場所にいたと気づいたとき。
- ・ただ、大事なのは、そうなる前にどうやってその川に関心を持ってもらうか。私もあの手この手でやっているが、言い方は悪いかもしれないが、子供をダシに使うのは非常に有効である。
- ・川遊びの文化というのは、我々から後の世代、今の子供たち、その保護者である30代も抜け落ちていって、2世代にわたって川との関わりがほとんどなく過ごしている。どんな文化も3世代欠けたら完全に消滅してしまう。
- ・鏡川は、県庁所在地でありながら、少し行けばそこで泳げる川ということで、全国でも珍しい。もちろん世界的に見てもこんな川はなかなかないので、その価値を知ってもらう必要がある。目の前に、お金も要らないワンダーランドがある、という発信を、この「パートナーシップだより」を含め、あの手この手で子供たちに知らせる必要がある。
- ・いろいろな発信のためのアイデアを持っている方が市役所の3,000人の中にいると思うので、ぜひそういう形でやっていただければと思う。

【委員】

- ・高知市職員の参画ということでは、前回の計画策定時、私は鏡地域振興課の課長を拝命しており、計画

に関連する部局の一つとしてワーキンググループの一員を任せられた。大変ではあったが、やった意味があったと思う。今後、作業を進める上で、方法はお任せするが、関連部局の職員の知恵が先に集まるようにしたらいいと思うので、ぜひ検討してほしい。

【委員】

- ・広げる部分というのは、人がその情報に触れたとき、その情報が自分にとって価値があると思わなければ、受け止めないし記憶しないので、発信する側は、重要だから受け止めてくれるだろうではなく、重要だと思ってない、無関心な人に対して、それが重要であるというところまで教える必要がある。
- ・子供達の話もあったが、やはり教育は子供から次世代である。子供が価値を受け止めれば、親は、その要望を実現してあげたくなるものなので、川遊びも山遊びもさせてあげたくなる。子供にとって、楽しく価値がある体験であるということを伝える必要があると思う。
- ・その中で、生物多様性について、スマホアプリを使うことで動植物を識別ができるのは良い取組だと思う。今後、生物多様性が重視される社会の中で、ものすごく価値がある知識になる。
- ・先ほど、川の災害の話もあったが、どういうことが災害発生の予兆なのか、どういう形状・地形だと危険なのか、そういうことを学んでおくこと、知っておくことも今後非常に価値がある。そういう価値があることを、川が高知市内で完結するという鏡川の特異なエリアであれば、全て実践で教え込むことができる。そういうフィールドを活用していくば、山の奥地であっても、都市部じゃないところであっても、その周辺エリアの豊かさというものを認めれば、そこが新しい自分の住居選択地になると思う。
- ・高知市は、高知県内で人口が集中しており、日本の東京一極集中の縮小版だと私は思っている。日本は、今後、東京一極集中から地方にどうやって人を移住させるかというのが大戦略にならざるを得ないと思っているが、それを、高知県は高知市との関係の中でやらないといけない地域であるし、高知市は高知市と春野・鏡川エリアでやらないといけないと思う。
- ・高知市は、ミニマムな日本全体の課題の実現を迫られているエリアだと思っていて、小さくなつたからこそ分かるのは、それぞれの地域に良さがあるのに、その良さを知らないので、とりあえず町に集まってしまう無関心な人達という課題に、小学校教育からしっかりと取り組んでいく必要がある。
- ・自然の活用、自然から学ぶこと、自然とどう触れ合うかが、今後、社会に入る子供たちが、今の〇×クイズのような教育一辺倒の価値以外を持っていることを、とても評価される社会に溶け込めるのではないかと思う。そこと絡めていく形を考えることで、それが仕事になって、つながっていくこともあるだろうし、高知市自体がそういう次世代教育のトップクラスになれば、高知市で学んで、自分のところに帰って活かしていくことがあり得るのではないか。
- ・高知市では、日常生活でクマを気にしていないが、ニュースで、「日常でクマに襲われることを気にしながら生活しないといけなくなった」と言っている人がいた。
- ・クマを気にせず自然を学べるフィールドがあるというのは、今後、大きなアドバンテージになるのではないか。

ないかと思う。クマの影響で自然教育ができなくなっているエリアは広い。九州と四国は、自然教育のフィールドとして非常に注目され得る可能性があるので、投資の価値はあるのではないかと思う。

【委員】

- ・関係人口の取組など、いろいろなことをやらないといけない中で、生物多様性に関して、鏡川に子供たちを出して、何かやるような努力のほか、「まちのコイン」など、人々に关心を持ってもらおうと一生懸命やっていて、これに関しては、皆さんの努力の方向性はとても良いと思う。
- ・他地域の自然環境に関する会議等で思うことは、東京一極集中というだけではなく、都市部で生活している人が増え、その間に、自然に関わる、あるいは自然に対するつき合い方、自然そのものの本質について、知らないで育っているのが現実だと思う。もっと自然に親しみを持ってもらおうと、いくら行政が頑張って計画を作っても伝わらない。
- ・やはり、子供たちに自然への親しみを持たせるとか、自然と触れ合うとか、自然が何であるかと考えさせるように、どうやって引っ張っていくかということが大事であって、そうすれば、大人、少なくとも子どもを育てている人は気が付くことが多いと思う。
- ・私は都会育ちだが、親が山に連れて行ってくれ、年に何回か山の中で暮らして、その中で自然が好きになって、自然とつき合う仕事を選んだ。将来的に何をするかではなくて、普段の暮らしの中で、少しでも親が関心を持って、子供を惹きつけ、子供と一緒に親も自然と触れ合って、みんなが自然を考えるようになってもらわないと、先はないと思う。
- ・クマの話も、昔は当然のこと、集落の周りにはいろいろな動物がいるし、さらに怖い動物もいっぱいいる世界だった。自然というのは、そういう人知を超えた、いろいろなものがあるところで、人間はそれと対峙して生きていくということを教わって育つといったはずなのに、今はそれがないので、そういうところに少しでも近づけようと思ったら、もっと機会を作る必要がある。
- ・その中で、クマのように怖いものがいて、それが自然だということも、分かってもらえる。安心も重要だが、やはり自然を侮ってはいけないので、その先にあるものも少し考えてもらいたい。

【委員】

- ・非常に様々な活動をされていて素晴らしいと思うが、例えば、鏡川流域関係人口創出事業の 2,594 名の参加者の中で、リピーターはどのくらいいるのか。興味のある人は、何度もリピートをすると思うので、2,594 人の参加者であれば、どのくらい広がりが出てきているのかというところに興味がある。
- ・リピーターばかりであれば、延べ人数は増えていくが、広がりは出てこない。そうするとあまり広がっていないのではないかと思う。そこら辺りのデータも把握して、その中でリピーター以外の方の裾野をどう広げていくかの工夫も必要だと思う。
- ・もう一つ、「ぼっちり」も非常に良い取組だと思うが、スマホアプリとなると、年配の人は使えない人

もいるのではないか。利用者の年齢層によって、広がり方も変わってくると思うので、幅広い年齢層に使ってもらうことを考えると、その辺りの工夫も、今後の課題として考えていくことが必要だと思う。

【事務局】

- ・市の取組についての情報をどうやって届けるか。高知市、高知県ならではのツール、新聞等の媒体もあるので、予算も含めて上手く調整していかないといけないが、既存のメディアと新しいメディアを絡めながら、やっていく必要があると改めて感じている。次の計画に向けて考えていきたい。
- ・また、市の職員の参加については、会計年度任用職員を含めると4,000人近くの職員がおり、多くは高知市に住んでいるという意味で、鏡川をはじめ、浦戸湾を中心とした七河川に日常的に触れ、通勤途中など川に接しながら生活している。その中で、委員に取り上げていただいた、以前の担当職員のような熱意を持っていれば、そのことに向けて取り組んでいけると思う。
- ・もう一方で、各担当部局の役割分担の中で、いかに鏡川と共に持続ながら、仕事に向き合ってもらえるかということも大事だと思う。例えば、街路市係（商業振興課）の日曜市を取り上げると、市へ出店している方々は、鏡川の上流域にお住まいの方が多い。生産者が直接出店し、藩政時代は城下町の人たちに物品を売る交流の場だった。そういうところで鏡川流域ということを意識してもらって、流域内の交流とか、上流・下流のことを少し意識してもらえると、鏡川というベースが街路市を通じて広がっていくようなことが出てくる。我々も工夫し、各部署と連携しながらやっていく必要がある。
- ・次に、ご紹介いただいた府内のワーキンググループについては、各部局の担当と一緒に話をする機会というのはなかなかないので、鏡川という共通のテーマを持って議論することはとても大事な時間だったと思う。今回、時間的な制約もあり、どのようにそういった場を設定していくかを考える必要があるが、府内の意見を聞いて形を作り上げることは必要なステップなので、工夫して取り組んでいきたい。
- ・イベント等の参加者について、特に子供たちをとのご意見をいただいたところで、例えば、川釣りのイベントは子供たちもたくさん参加しており、土佐山学舎では体験授業の一環として実施していたり、土佐山にお住まいの皆さんに川釣りの先生をしていただいたりということもしている。
- ・スマホで撮った動植物の写真をAIが同定するアプリは、スマホがあれば、動植物をその場で学ぶことができる上に、多くの方が一緒にできるという点で、高齢の方にとっても、例えば、動植物の知識を持っているおじいちゃん、おばあちゃんに子供たちと一緒に出かけてもらい、アプリも活用し、子供が探してきた動植物のことをお話していただく、そんなきっかけにもしていただけると思う。
- ・このアプリでは、夏休みにクエスト期間を設けて、イベント的に実施しており、その間いつでも取り組んでもらうことができる。今まで何月何日に、どこに集まって、という観察会のようなイベントが通例だったところ、8月の1か月間で、それぞれのご家族やグループの予定に合わせて、好きな場所に行って、このアプリを使って同定し調査できるので、機会の創出という点で、かなり幅広くできたと思う。
- ・この1か月間のクエスト期間の成果として、鏡川の中に、どのポイントで、どんな種が見つけられたか

をプロットした地図にし、市民の皆さんに見ていただける生き物マップも作成している。そこから、鏡川流域に様々な動植物がいることが見え、そういったデータの蓄積という意味では、取組を継続していくことで生物多様性の把握ができる。

- ・また、小学生だけではなく、中学生高校生大学生と、様々な年齢層の学生の皆さんが、この活動に参加してくれている。我々から声がけすることもあるが、学校の方から、こういった探求学習をするが、何かできないかというご相談いただくことも多い。
- ・そういった形で様々な年齢層の子供たちに関わってもらう中で、大学生が小学生に教えてくれたり、一緒に活動したりなど、多世代の交流の場にもなってきてている。特に、子供たちだけではなく、親の世代や、おじいさんおばあさんの世代も参加してくれている。
- ・オンライン受講など、デジタル化への抵抗感やハードルは、大分低くなっている印象でもあり、このアプリの活用も、少しずつ成果効果を広げていきたいと考えている。

【委員】

- ・次期計画に向けて、最初は川の中だけの話だったが、それが広がって、森の方までたどり着いた感がある。森の課題は、環境部だけではなく、いろいろな部署が連携しないといけない。もっと森の話をしていく必要があると思う。
- ・鏡川がこの後どうなるのかは、物部川が典型的に示している。物部川でもいろいろ活動しているが、あのような状態を鏡川も当然引き起こすだろうと思う。山が崩れ、ダムが埋まって、水が足りなくなつて、いろいろな問題が起きている。そこをもっと見習っていく必要があるのではないか。
- ・所管でいうと、他部署の要素が強くなってくるとは思うが、森に関わる委員がいるので、もっと森の分野を話していかないといけない。川のことだけでは、後始末だけの話になってしまふのではないかというのがあり、もっと突き詰めていく必要があると思う。

【委員】

- ・森に関しては、人手の問題がある。面積的に言うと、もっと人は必要なところ。
- ・ただ、林業で回すのかとなると、今の森林、林政の方向は、林業のみではなく、森林を生かした様々な環境の可能性を検討しており、森林×（かける）木材が林業だとすると、森林×教育が先ほどの環境教育というタイプの収益の可能性であり、森林×何を持ってくるかで、様々なパターンがある。今、林野庁も含めて、次の森林・林業基本計画の方では、そういった要素を盛り込もうとする動きが見られる。
- ・高知市は、その中で、森林というものを、×木材で林業だけではない形で模索するということをやらないといけないが、その人材を育てるにも、まずベース需要がないといけない。高知市の小学生を1週間、2週間、自然に入れ込むのが当たり前になれば、それがベース需要になる。
- ・そのベース需要を足がかりに生計が立てられるような仕組みで教育を提供することで、何か産業的な

部分ができれば、観光に来られた方がそこにも入り込み、観光バリエーションの展開というふうに広がっていくことが今後の森林活用の方向性かと思う。

- そこで、森林がそういう資源になるのであれば、物部川の事例を鏡川の森林エリアでも引き起こすことがないように、投資するという形だと思う。まず投資と言ってもピンと来ないだろうし、投資して何の価値があるので、山の価値というものを実感しかけた頃に整備するというような、上手くいく流れが必要かと思う。

【委員】

- 鏡川流域の森林組合は森林所有者の協同組合で、おそらく森林組合が一番、地主さんの状況は知っていないといけないし、知っているつもりである。
- 現在、森林所有者が高齢化しており、これから相続問題が発生してくる。ふるさとのため、一生懸命売りに出た森林を買ったが、家族は大反対だったとなると、相続では、十中八九、財産処分的な売却が始まる。予想は難しいが、今後 10 年くらいで、相続の義務化や登記の義務化も相まって、面倒くさいから全部売るということが起きる。
- そのときに、次の森林所有者の意思が、清流保全も含めてしっかりとやっていこうとするのかどうかが、ものすごく大事なテーマになる。過去にも、デベロッパーが森林を購入して、土捨て場になってから大騒ぎになったこともある。
- 区域指定の議論については、一旦、盛土規制法の施行で終結したが、もう一度、森林所有者が代替わりしていくと財産処分的に売却してしまうことは、所管課も含め、知恵を絞る時期に来ていると思う。
- もう一つは、木そのものが大径木化し、素人では手を出せない、うかつに手を出すと（木が）死んでしまうくらい大きくなっているという問題がある。転じて、ずっと掲げてきた針広混交林を持っていくというからには、どこかで切らないといけないので、鏡川流域の奥地、いわゆる林業として伐採するエリアにおいても、将来的にどういう林相を持っていくのかも大事なことだと思う。
- 森林組合は、こじんまりしており、本当は作業員が 20 名はいないと注文に追いつかない。今後もしつかり経営していくが、本当に職員次第で、人が集まらないので、助けてほしいところ。

【委員】

- 今の意見は、非常に重要なこと。この審議会で、景観保全形成に関して、区域指定などの議論をしたときにも、例えば市議会との関係や、そもそも行政として規制できるものなのかななどの問題は現在もあると思うので、心して取りかからないといけないなというのが一つ。
- それから、森林の取扱いに関しては、財産整理で売られてしまったときに、その管理がどうなっていくのか心配している。要するに、木が大きくなり、もう伐採すべき時期に達しているところが非常に多い。それをどんどん切っていくと、今後はしっかり更新作業ができるかどうかが大きな問題で、一部で

言われているような針広混交林に持っていくという話は、森林関係の研究者でも、非常に難しいことだと認識されている。

- ・針広混交林に持っていくための施業をしなければ実現不可能で、大径木化していて出すのが難しいこともあるが、その後の伐採跡地の管理ができるかも心配な状況である。
- ・そういうふうに木を切った後、きちんと管理していない状態だと、シカが集中してくる。かつては、シカは数が少なく、拡大造林をやった時代には、それによってシカに良いエサ場を供給したと理解されている。そのときは、シカがまだ少なく、問題にはならなかったが、現状、シカが増え、エサがない状態なので、木を切ったところに必ずシカが集中する。鏡川流域では、シカの高密度化とその悪影響はまだ顕著ではないが、今後の森林管理によっては、状況の悪化が非常に懸念される。
- ・そういう意味でも更新ときちんとした管理という点を心配しており、鏡川流域の将来についても危ない状況にあるというのは、市にも考えていただきたいと思う。

【委員】

- ・最初の話の補足的なことになるが、子供をダシに使うということをもう少し深掘りすると、子供が生き延びでいけるのかと、思うこともある。
- ・防災教育で、地震が来たらどうしようということを学ぶが、どこに逃げても一時的で、自然の仕組みが壊れているかもしれないし、そのときに自然というものを知らずに、その災害から逃れることはできないと思う。自然がどんなものか体感していないと分からない。雨が降ったら川がどうなるか、森がどうなるか、そういうことを知らずに生き残ることはできないと思う。
- ・県でも、市でも、国でも環境分野は立場が弱いが、環境という当たり前のものがなくなったら、防災にしても何にしても大変なことになる。そういう広がりは、ぜひ、市の中でもやっていただきたい。
- ・環境部というのは、人間で言えば循環系みたいなもの。普段は、誰も心臓が動いてくれて、ありがとうとは思わないが、本当に動かなくなったら大事。それと同じことで、今物部川が瀕死の状態になっているし、鏡川もそういう状態になるかもしれない。循環系がだめになると、人間の場合大事なので、そうならないためにやる、その材料として、鏡川というのはもっていこいの場所である。
- ・これから将来を担う子供たちには、単に環境教育プラスアルファではなくて、基本的な力が必要。危険なこととどうやって付き合うか、エデュケーションで引き出す。そういう場も含めて、何かしようと思ったら、知恵を働かして、単に環境の問題ではなく、教育とか防災とか、そういった様々な市民に意識を向けるには、またとない場所である。
- ・鏡川は、安心して川に潜って中から見ることができる。こんな川は日本でも少ない。普通、上流へ行つたら水が綺麗なのは当たり前だが、下流部で水が綺麗であれば、下流部ほど生き物が多い。折角の財産が残っているうちに、子供のために、また、子供だけでなく大人も含めて、自分たちが将来生き残っていくためにベーシックなものとして、この流域のいろいろなことを知っておくことが大事。それがあつ

て初めていろんなことが起こったときに、行政の立場であるときも物事を進めやすくなると思う。

- ・これだけのことをエネルギーかけてやっているので、単に川がキレイになるとか、山がどうなったではなく、みんなが鏡川に関する心を持って、本当に高知市も良かったと、そういう方向に大風呂敷を広げていきたい。

【委員】

- ・この審議会の進め方について、決めなければいけないことがあるならば、何を決めないといけないのか、今日は何と何を決めましょうということを次第に入れていただきたい。報告がある場合は、その報告はこのくらいのボリュームと決め、会議中は発言の機会も少ないので、一人一人の言いたいことも全然ジャンルが違うので、委員の意見は個別に聞いていただきたい。
- ・どんな意見が出たのかをまとめて、ここで皆に共有するという流れでも良いかと思う。
- ・もう一つ、私は漁協の組合に入っているが、漁協が鏡川清流保全で一番のエンジンにならないといけないと思う。関係人口も含め、ここがもっと主体的に鏡川のことについてイニシアチブをとっていかないと、どうしようもないと思う。
- ・それから、鏡川に関する市民の関心を深めるためには、子供や保護者もそうだが、もっと鏡川に行く機会を作ってほしい。自然と行きたくなるような、例えば、川にプールを一つ作ればいいと思う。子供たちを呼ぼうと思えば、日陰を作つて、そこで移動型体験できるようなスペースを作ればいいし、そういう具体的なことをしていただきたい。
- ・問題点をここで話し合うだけではなく、どんなことをしたらいいのかという具体論を話してもらいたい。専門家が集まっているわけなので、聞き取りをして、環境部で難しければ、他の部局につないで、全体的に鏡川を理想の形にするため、誰がどんな役割をしていくのかということを整理してもらいたい。その整理したことを審議会で報告していただき、その中で問題があればどう思うかという聞き方をしていただかないと、委員の意見を限られた時間内に聞き取ることは無理である。
- ・市役所には、各委員 1 時間ほど時間を取つていただきて聞き取りをし、それをまとめてメールで報告するような進め方をしていただけないかと思う。将来に向けて新しい仕組みを作つていただかないと、鏡川はもう間に合わないと思う。

(3) 高知市総合計画との関係について

- ・資料 4について、事務局から説明
- ・質疑応答

【事務局】

- ・審議会としては、年度末に近い時期にもう 1 回開催できるように、また日程を改めて調整させていた

だきたい。

- ・委員の皆さんへの個別の聞き取りは我々もすごく参考になることであり、やらせていただきたい。

【委員】

- ・審議会は後1回ということなので、ぜひ実のある聞き取りをしていただきたい。
- ・漁協に関しては、私は中から意見を言うが、本当に鏡川を変えようと思ったら、ここのエンジンがしっかりしていないと無理。そこは、本気でやっていただきたい。物部川くらいしっかりとやってくれれば、鏡川も良くなると思う。

【委員】

- ・私が水産の技術職で県庁にいたとき、土木部等の開発部局にいろいろと思うところはあったが、意見を言えなかった。多分どこの自治体でも一緒だと思う。ところが、漁協に来たときに驚いたことがある。漁業権というのは、あまり一般に知られていないが、県を通じて10年に1回更新している。内水面の要件はたった二つで、その川がアユやウナギやアマゴといった漁権魚種の増殖に適した川であること、増殖に適した川だと県が認め、かつ、それに対して漁権者が増殖行為を行うこと。一般的には放流だけだが、産卵場造成も含めて、その二つだけである。
- ・物部川漁協で最初に言ったのは、この川は増殖に適した川ではないということ。この責任はどこにあるか、水産庁聞くと、水産庁には、権利者で解決するように言われた。まさにそのとおりで、そのことを私は河川管理者と利水権利者に言い続けている。漁協には、それくらい権限がある。
- ・もう一つは、平成9年に河川法が改正されたが、法律の第一条が変わるというのは理念が変わること。本来その時点でもっとガラッと変わるべきものが変わっていない。私は法治国家としていかがなものかと言い続けている。すると、特に国交省辺りは全然違う。今は物部川の河川改修等の事業で、ビフォーアフターを比べて、アフターが悪くなることは絶対にない。どんどん良くなっている。河川工事のときにはワクワクして、こうしてもらおう、ああしてもらおうと考えている。逆に言うと、最初の頃は、どうやってもらうかを考えていた。今では、逆に向こうからどんどん提案してくれる。
- ・それくらい漁業権というのは、あらゆる組織、県にしても市にしても言えないことが、法的権限を持つちゃんと河川環境に対して言うことができる。逆に言うと、全国的にそのことを本当にやってないなというのが分かる。だから、日本中の川の差を見たときには、一体何をしていたのかと思う。県の内水面漁業の会に出ても、そのことを分かっている方はいないというのが現状。それも含めて、本来の自分たちに与えられた法的な義務は果たさなければならないが、行使すべき権利も当然言うべきだと思う。